

巻頭言

平成 25 年度は文部科学省から発信された大学改革に基づき、主として意思決定の迅速化、的確な意思決定のための組織体制の見直しなどを行いました。これは、いわゆるガバナンス改革と称されるものです。

平成 26 年度はそれと平行して、本学の優先課題として自己点検評価の実質化と充実を挙げ、経年的評価をいつでも誰でも容易に行えるようにするにはどのようなデータを蓄積するかについて検討してまいりました。その大きな柱は、教員の個別評価、総合的な教育評価・研究評価・地域貢献評価、それらを公表する手段の一つとしての年報改革でした。

改革はまだ途上ですが、この年報にはその一部が反映されています。4.4 の委員会活動報告の様式を中期計画に対応できるように改正したことや、6. の教員の業績の項における研究業績の取り上げ方の基準を明確に示したことです。また、附属センターの活動がわかりやすく記録されるように地域ケア総合センターと看護キャリア支援センターの項を改めました。さらに、学外とかかわりながら行っている事業をまとめて、12. には大学として取り組んでいる連携事業をいう項も設けました。

本学は、開学から 15 年近く経過する大学として、開学時からの教員を多数擁しながら基盤を固めてまいりました。しかし、看護系大学である本学は、超高齢社会を迎える日本の保健医療福祉上のニーズの変化に応じた人材輩出を配慮せざるを得ない状況が生まれています。固めてきた基盤を見直す必要性も感じ始めています。教育内容の工夫や変化が必要となり、研究においては一層臨床現場や地域社会への応用を意図した研究の推進が求められています。学生の変化も著しく、現代の学生に適した教授方法を取り入れること、多様な学生の個性を見極めながら個別の支援も加味することが重要です。

このように、多忙な中でも何とか成果を出してきた従来型・教員マイペース型の教育研究に固執できない状況が生まれてしまいました。より手のかかる教育方法や研究内容を、開学以来の本学の理念を変えることなく、容易さをもって遂行できるような教員の質向上が求められている時代を迎えているとも言えます。

このような状況に応じた歩みは年報で表現しにくいところです。しかし、本学の年報には、この 1 年の大学全体の様相、教職員一人ひとりの学内外での役割・活躍や、個人で努力したことの成果などが、世間におもねることなく正直にほぼ網羅的に掲載されています。どうぞご覧いただき、ありのままの本学の姿とその背景にある考え方や気づきをくみ取っていただきたいと思います。

読者の皆様、是非 <http://www.ishikawa-nu.ac.jp/>にもアクセスしてみてください。忌憚のないご意見をうかがえれば幸甚です。

石川県立看護大学 学長 石垣和子



第 15 回入学式
(平成 26 年 4 月 4 日)



夏のオープンキャンパス
(平成 26 年 7 月 19 日)



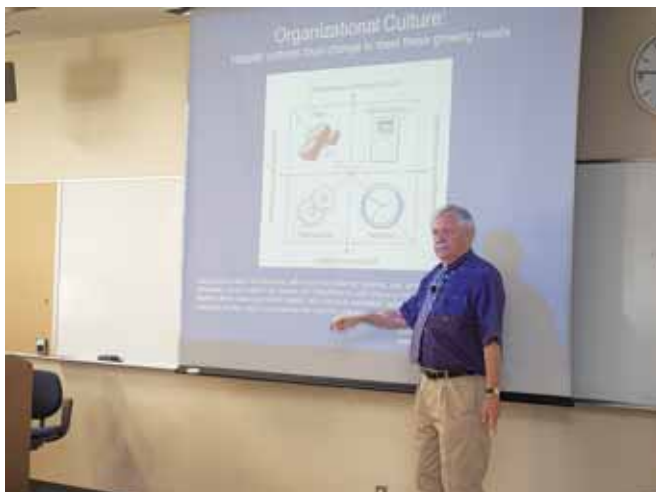


第9回夏期アメリカ看護研修（平成26年8月26日～9月8日）





JICA 日系研修 (平成 26 年 7 月 15 日～8 月 8 日)



米国ワシントン大学との交流事業 公開講演会 (平成 26 年 9 月 11 日)

「Team Approaches to Current Challenges in Nursing Care」

ワシントン大学看護学部 ノエル・クリスマン教授



韓国全北大学看護学部訪問 (平成 26 年 11 月 17 日 覚書締結)



感染管理認定看護師教育課程の開設
(開校式 平成 26 年 7 月 16 日)



(修了式 平成 27 年 2 月 18 日)



第 11 回卒業式 (平成 27 年 3 月 13 日)